

『のんびり洋書めぐり』



Ehon House

(株)岩崎書店 絵本の家事業部 仕入担当

望月真由



■ 子どもと英語多読

「多読におすすめの英語絵本はありますか？」そんな問い合わせが増えてきています。多読とは、細かな文法や意味を気にせず、自分の読解力に合った文章または本をたくさん読むことです。特に外国語習得で活用される方法で、大意を汲みながら文章を読み進めることで、さらなる語彙力や語学力を身につけることができると言われています。自分に合ったレベルというのがポイントで、何もわからない、調べないと読み進められないという文章や本を選んでも多読にはなりません。ある程度の波（わからない意味や文法など）に揺られながらも、物語を楽しみながら読み進めることができる、これが多読の骨格だと思います。

そのため、「多読におすすめの英語絵本はありますか？」という問いに、安易に答えることはできません。どのくらいの波なら心地よいのか。それを把握することが、多読成功のカギともいえます。特に子どもたちの英語多読を実践する場合は、周囲の大人が子どもたちの楽しく泳げる適切な波（本）を、子どもたちに用意してあげることが必要と考えます。

さらに、多読とは、日本語、英語問わず、「本を読むことが好き、心地よい」という子ども時代の読書体験がとても大切だと考えます。今回は、子どもたちが本に触れあう、物語に出会うことの大切さを、英語多読というキーワードと絡め、改めて考えてみたいと思います。

■ 子どもと読書：日本

子ども時代の本との出会いは、その後の読書習慣に大きな影響を与えます。初めて読み聞かせてもらう絵本から始まり、読み書きを学ぶ年齢になると、自分の読解力に合った本を選び、本を自ら読み進めることの魅力を知るようになります。日本では、公立小中学校

には図書室が完備され、ほとんどの市区町村に図書館があり、書店の減少が叫ばれる昨今でも、子どもたちは本に囲まれて暮らしているといえます。全国の公立小中学校で朝の読書活動が推奨され、近年 GIGA スクール構想によりタブレット教育が普及しても、急な自習時間には持参した本を読むことも多く、図書室や学級文庫の利用価値も高く位置付けられています。

こうしてみると、日本に暮らす子どもたちの多くは、本に出会う機会が豊富にあり、程度の差こそあれ、読書習慣をつけるには十分な環境が整っているといえるのではないのでしょうか。

■ 子どもと読書：イギリス

一方で、他国の子どもたちは、どのように読書習慣を身につけているのでしょうか。多くの国や地域において、読書は教育現場でとても大切な活動とされ、将来有意義な読書習慣が身につけられるよう、様々な活動が行われています。

2016年から4年間、私たち家族は南アフリカとイギリスで生活をしました。出発時、3人の子どもたちは、長女8歳、長男5歳、次女2歳でした。ここでは私が実際に暮らした二国を例に挙げ、英語圏に暮らす子どもたちの読書活動を紹介します。

イギリスでは、Book Trust というチャリティ団体がイギリス政府と組み、Bookgifting という取り組みを行っています。Bookgifting とは、読書力向上のためには、自分の本を持つこと、自分で本を選ぶことが重要であるとし、子どもたちに無料で本を提供する活動です。

私が生活していた2019年当時のイギリスでは、Reception Year（4歳～5歳）とYear 7（11歳～12歳）の子どもたちは、学校から一冊～数冊の本を贈与されていました。



Reception Year とは、年齢で見ると日本でいう幼稚園の年中ですが、イギリスでは小学校就学前の大切な1年と位置付けられており、小学校と同じ施設に学級が設置されていることが多く、読み書きを学ぶ最初のステップ期といった印象を受けました。Bookgifting の日は、とても印象深く覚えています。次女や長男は該当学年ではありませんでしたが、Reception Year の子どもたちは皆、Book Trust の袋を大切に抱えて教室から出てきて、迎えに来た保護者に満面の笑みで真新しい絵本を見せていました。子どもたちの「自分の本を持つ」喜びを目の当たりにした瞬間でした。

長女は当時、Year7 でしたので、幸運にもBookgifting の恩恵にあやかりました。日本では小学六年生の年齢ですが、イギリスでは中等教育1年目という位置づけで、高校までの教育課程につながる学習をスタートさせる重要な区切りの年でもあります。

長女は Bookgifting 当日に先立ち、写真のようなパンフレットを受け取り、好きな本を2冊選んで申請していたようでした。この年齢の子どもたちには、「自分の本を持つ」だけでなく、さらに「自分で本を選ぶ」経験ができるよう組まれているのだなと思いました。

こうしたイギリスにおける国を挙げた一大読書活動プロジェクトは、いかに子ども時代の読書体験がその後の人生において大切なかを教えてくれている気がします。

■ 子どもと読書：南アフリカ

私が生活していた2016 -2019年当時の南アフリカでは、書店にも絵本コーナーが充実しており、翻訳絵本も数多く目にすることができました。しかし、南アフリカではアパルトヘイト政策期に多くの作家が国

外逃亡を余儀なくされた歴史があり、翻訳絵本の普及も近年になってからのようでした。また、依然として南アフリカでは本は高価なものであり、自分の本を持つことは当たり前ではありません。そんな社会背景の中、学校では様々な読書活動が行われ、子どもたちに本や物語の魅力を伝えるために奮闘する大人たちを多く見かけました。

子どもたちが通う学校には小さな図書室があり、英語やアフリカーンス語、ソト語など多文化国家ならではの様々な言語の本が、所狭しと並んでいました。低学年の子どもたちはまず、先生があらかじめ選んだ学級人数分の本を、円になってぐるぐると回します。音楽が止まったところで手元に来た絵本を持ち帰り、翌日また持参する。こうしてランダムに選ばれた本に親しんだら、中学年では図書室を自由に使うことが許可され、自分の好みにあった絵本を選び、借りることができます。2か月に一度、各学年で一番多くの本を借りた子どもに贈られる賞があり、学年集会で表彰され、賞品に National Geographic の本が贈られました。

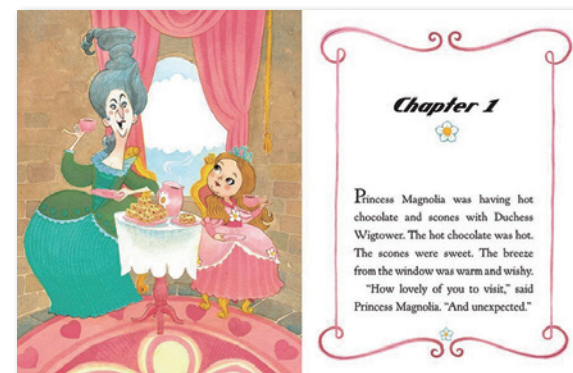
また、子どもたちがとても気に入っていたのが、Hooked on Books というイベントです。外部演劇団体 Hooked on Books のメンバーが学校を訪れ、子どもたちに人気のお話をミュージカル仕立てで軽快に演じてくれます。読むことが苦手な子ども、物語の魅力を五感で体感することができ、本を開けば向こう側にはこんなにも心弾む世界が待っているのだと教えてくれます。

■ 絵本と読み物の架け橋：ファーストチャプターブック

このように、子どもたちは大人たちの工夫のもと、様々な読書体験を通して読書の魅力を体感し、自分で

心地よく読める本を選ぶようになっていきます。母国語であれば、こうした読書習慣がおのずと多読につながり、本が人生のパートナーとなることでしょう。一方、外国語であれば、自分の外国語レベルを把握することと、そのレベルに合った外国語の本を選ぶことという課題が浮上します。一般的な解決方法は、レベル分けリーダーです。文法や語彙レベルを考慮し、レベル分けされたシリーズで、海外出版社の多くが良書をそろえています。リーダーを読み進めることは、多読入門に欠かせないと考えます。しかし、リーダーばかりでは、「本を選ぶ」楽しみが味わいきれないのではないかと考えています。

そこでおすすめしたいのが、絵本と読み物の架け橋といえる、ファーストチャプターブックです。日本でいう、低学年のよみものに該当するのではないかと思います。章立てされていますが、各章は短く、挿絵は多く、フルカラーで堅苦しさの無い作りです。絵本との最も大きな違いは、シリーズものであることが多いという点でしょうか。読み物に触れたばかりの子どもたちが、飽きずに心地よく自らの読解力で読み進められるよう、毎回同じ主人公がスリリングな体験をし、でも最後はいつも同じ場所に戻ってくる。こうしたプロットが子どもたちをそっと支え、読み物の世界を楽しく泳ぐことができます。リーダーに加え、現地の子どもたちが夢中になっているレベル分けされていない読み物を取り入れることによって、より読書の魅力を味わえる充実した多読を続けられるのではないのでしょうか。



『Princess in Black』(Candlewick 2014) シャノン・ヘイルとディーン・ヘイルが夫婦で出した大人気シリーズ。プリンセスごっこも、たたかいごっこも大好きな子どもたちのために作ったお話がもとになっている。

Text copyright © 2014 by Shannon and Dean Hale Illustrations copyrights © 2014 by LeUyen Pham

■ たくさんの選択肢を子どもたちに

こうしてみると、母国語でも外国語でも、子ども時代の楽しい読書体験は、多読の基盤ともいえる大切な体験だとわかります。さらに冒頭でも触れたように、子どもたちの英語多読には、それぞれの子どものレベルと興味に寄り添う、英語の本の選択肢が必要です。しかし、日本では、子どもの英語の本はまだ少なく、買いづらいのが現状です。楽しい英語読書体験をする機会も、なかなかありません。日本でも、子どもたちの英語多読につながる本をもっと増やしたい! 「次はあれを読みたいな」と、読書の連鎖を生むような英語の本棚が身近にあれば、日本でも英語多読の文化はより広がっていくのではないのでしょうか。

私の好きなことばに、南アフリカの小学校の校長先生に教えてもらった、Dive into Reading ということばがあります。読書の海へ飛び込んでみる。そこには果てしない物語の世界が広がり、子どもたちの未来へ役立つエッセンスが見つかる無限の可能性が潜んでいます。それだけ広い本の海を、魅力的で思わず飛び込みたくなる英語の本の海を、日本に暮らす子どもたちに案内することはできるだろうか。自分のレベルに合った心地よい波に乗れる本を、それぞれの子どものために差し出すことができるだろうか。そんなことを考えながら、英語の本を紹介するミッションと向き合う毎日です。



写真左: Bookgifting 書籍パンフレット
写真右: 長女が選んだ2冊の本

